

A. E. と The Hermetic Society (補遺)

小 川 美 彦

は じ め に

『A. E. と The Hermetic Society』(明治大学教養論集46号)の緒言で約束しておいたように、その後ジョン・エグリントンの『エイ・イー伝』を入手したので早速補筆することにする。一読して感じたことだが、ぼくたちの目的の上からはあまり得るところがなかったといわざるをえない。それほど上記の伝記が出版された当時〔1937年〕においても、少くともアイルランドでは、すでに秘教学会や神智教会の存在は影のうすいものになり、エグリントンも友人らの忠言もあって、それらへの言及は最少限にとどめざるを得なかったものと思われる。第一、エイ・イーの大地崇拜にもとづく神秘思想がはたして正統な神智教とどういうものであったかどうかはかなり疑問があり、またエイ・イーの生涯に則してみても、1910年代から20年代にかけて、『フィアリッシュ・ホームステッド』誌およびその後身の『フィアリッシュ・ステイツマン』誌を根城に、国民的な良心として健筆をふるった時代がとりもなおさず彼のもっとも社会的に重要な時期であったということができ、この意味から、エグリントンの伝記がこの時期の彼に最大の紙数を費しているのもけだし当然なことといわなければならないからである。エイ・イーの社会改革家ないしは啓蒙家としての面についてはまた機会があれば論ずることにして、ここでは当面の問題であるエイ・イーの秘教学会について、エグリントンの『エイ・イー伝』を中心に、その他あらたに入手した資料をもとに気のついた点を指摘するにとどめる。

なお、以下の補遺で用いた略号のうち、あたらしく追加すべきものは以下のとおりである。

- FS Frank O'Connor: *My Father's Son*. London, 1968.
MAE John Eglinton: *A Memoir of AE*. London, 1937.
MI Lord Dunsany: *My Ireland*. London, 1937.
PC Austin Clarke: *A Penny in the Clouds. More Memories of Ireland and England*. London, 1968.

p. 89 エイ・イーの秘教学会が毎週木曜の夜に開かれていたことはエグリントンも指摘している [MAE p. 77]。

p. 92 エグリントンは第1次秘教学会が1886年にジョンストンによって設立されたといっている [Ibid., p. 53]。だが、設立者はジョンストンであったかも知れないが、1886年という説は支持し難い。おそらくエグリントンの記憶違いであろう。

p. 94 Upper Ely Place の Smith's Buildings の3号の図書室で毎週開かれていた討論会については、イエイツの自叙伝に依拠している [A pp. 236 & 241-2]。だが、エグリントンの兄の報告によると、このほかにも外部から教員が加わって随時討論会がもたれたようである。またピアノの得意なディックはしばしばベートーヴェンやショパンを演奏して聴かせた。このような場合、音楽に興味のないエイ・イーはみんなから離れて、ひとりデッサンや壁画の製作に没頭していたという [MAE p. 17]。

p. 94 & p. 111 注(52) 神智教会ダブリン支部のメンバーで、上記の建物内でディック夫妻やエイ・イーらとともに共同生活をいとなんでいた “H. M. Magee” なる人物が、実はエグリントンの兄のハミルトン・マルカム・マギー [p. 92 参照] であったことは弟によって明らかにされている [MAE p. 16]。

p. 94 エグリントンは Ely Place の共同生活に触れて、“when the ‘Lodge’

at Ely Place broke up and he [i.e. A. E.] was living again with his parents at Seapoint, we fell into the habit of meeting regularly in Kill-o'-the-Grang churchyard on Sunday afternoons, where we were often joined by Charles Weekes.” [Ibid., pp. 21-2] といっている。この言葉から察すると、どうやらディックとエイ・イーとの確執による共同生活の分裂騒ぎと、神智教会それ自体の内紛に端を発したダブリン支部内での分裂とはおのずから区別して考えらるべき問題のように思われる。

- ところで、Ely Place の共同生活は1891年4月に始まり [p. 94 参照]、翌年の1月に 13 Eustace Street へ移転するまで続けられた [LAE p. xxxii & PWR p. 28]。またエイ・イーの両親は1892年の5～6月ごろに 5 Seapoint Terrace, Monkstown に転居し、98年6月半ばまでそこに居住していた [Ibid.]。さらに LAE をみると、住所が Seapoint Terrace になっているのは94年7月からである。もちろん LAE は完全な書簡集ではないのでおのずから断定的なことは言えないが、以上の根拠にもとづいて、ぼくたちはエイ・イーが両親と生活をともにするようになった時期、つまり Ely Place での共同生活が分裂した時期を94年の半ばと考えてさしつかえはあるまい。そういえば、エイ・イーとおなじ部屋に寝起きしていたエグリントンの兄もその年に転居している [p. 114 注 (66) 参照]。ちなみに、同年10月の例の声明文 [p. 113 注 (60) 参照] には、ディック夫妻もエイ・イーとともに署名している。
- p. 95** エイ・イーがティングリ女史の教団を脱退した理由として、女史がプランケットの農業協同組合運動に彼が参加するのに反対したことが指摘されている。教団の有力な布教家が失われるのをおそれたためである [MAE p. 52]。
- p. 97** ボウエンという人物については詳しいことはわかっていない。だが、MAE p. 166n., LAE p. 157 および PWR p. 183 の記述を比較検討してみると、この人物は精確には Gilman Beamish [“Pat”] Bowen といい、1835年8月に *Canadian Theosophist* に “AE: Theosophist” と題する簡単な、追悼文と思われるものを寄せ、また同年12月、インドのボンベイで発行され

ているおなじく神智教会関係の機関誌 *The Aryan Path* に今度はかなり長文の論文〔題名不明〕を寄稿している。実は **p.101 & p.115 注(69)** で言及した1922年10月のエイ・イーの手紙というのは、この論文に引用されていたものである。

p.98 Rathgar Avenue のエイ・イーの日曜の夜会については、**MAE pp.73 & 84** でも言及されている。またこの時代と思われるが、その夜会の模様は同書 **pp.102-3 & 154-5** に述べられている、前者は **G. カンバランド (Gerald Cumberland, pseudonym of Charles F. Kenyon, 1879-1926)**、後者は **C. P. カラン [p.116 注(80) 参照]** の印象記である。このほかに、現代アイルランドの文学界を代表する詩人オスティン・クラーク (**Austin Clarke, 1896--**) と短篇小説家フランク・オウコナ (**Frank O'Connor, pseudonym of Michael O'Donovan, 1903-66**) がそれぞれの自伝でこの時代の夜会に触れ、その自由な雰囲気と、“old fur coat” のような温情あふるエイ・イーの人柄について述べている [**PC pp.50-6 & FS pp.30-2**]。

なお、ロード・ダンセイニの回想記というのは **MI** のことで、夜会へはほんのわずか触れているにすぎない [**Op. cit., p.17**]。 **MIW** にある引用がそのほとんど全文ということになる [**p.116 注(89) 参照**]。

p.99 後年の夜会以前ほどの魅力を失い、かつては若い文学者たちの保護者としてあれほどまでに親しまれ尊敬されたエイ・イーが、空疎な長広舌に終始する、欺瞞と虚栄の塊でしかなかったというオケイシらの印象については、エグリントンもある程度肯定し、青少年期に貧困によって培われた記憶力がかえって話術や語法までも規定し、ややもすれば彼の談話が一定の型にはまった陳腐な繰返しに終る傾向があったという、キングズリー・ポータ (**Arthur Kingsley Porter, 1883-1933**) 夫人ルーシ (**Lucy**) の言葉を引用している [**MAE pp.235-6**]。この傾向についてはオウコナも触れ、それが多くの青年たちに失望を与え、反撥と軽侮を招く原因になったことを指摘している [**FS pp.30-1**]。

p.103 注(1) エグリントンとエイ・イーの関係については、あまり詳しいこ

とはわかっていない。だが、前者の『エイ・イー伝』によって明らかになった点もあるので、以下に簡単に述べることにする。

エグリントンは “I was always a little outside his circle and we were even for some time estranged. But I was one of his early companions ...” [MAE p. vi] といっているが、彼がエイ・イーを識るようになったのはイエイツの紹介による [ILP p. 44]。またあとで触れるように、神智教会に加盟こそしなかったが、第1次秘教学会 [p. 92 参照] や兄との関係 [p. 114 注(66) 参照] からふたりはつねに親しい間柄にあったものと思われる [さきに引用したエグリントンの言葉が物語っているように、両者の関係がもっとも接近した時期は、1894年から、97年11月エイ・イーが農業協同組合運動に参加するまでの期間であった]。ところが、4年前の復活祭週間の武装蜂起を契機としてアイルランドの全土を覆った血腥い独立戦争もたけなわの1920年ごろ、ふとしたことからこの戦争の評価をめぐるエイ・イーとエグリントンの間に口論が起り、それが原因でふたりの関係は急速に冷却してしまった [MAE pp. 136 & 282]。その後表面的には仲直りしたが、1922年にエグリントンのイギリスに移住したこともあって、ふたりの交渉はほとんど途絶え、35年6月にエグリントンの隠棲地でたまたまふたりが再会したときには、エイ・イーの寿命はすでにつきようとしていた。

- p. 104 注(7) エグリントンによると、エイ・イーがプランケットの農業協同組合運動に参加して間もないころの『アイアリッシュ・ハウムステッド』誌の編集者は T. P. ギル (Thomas Patrick Gill, 1858-1931) であったらしい [Ibid., p. 51]。彼はのちにプランケットが経営を委任された *The Daily Express* の編集者になり [1898年7月～翌年12月]、経営不振のためにロード・アーディローン (Arthur Edward Guinness, 1st Baron Ardilaun, 1840-1915) [Cf. U pp. 71/78/97/79] によって買いとられるまでその職にあった [LAE p. 251 & S p. 67]。1899年5月、ムア [p. 103 注(1) 参照] がエドワード・マーティン [p. 109 注(39) 参照] の招きに応じてアイルランドへやって来たとき、歓迎晩餐会を催したのはギルで、その関係からムアの自伝的な

三部作 *Hail and Farewell* では、『デイリ・エクスプレス』誌の編集者としてしばしば言及されている。

p. 113 注(57) エグリントンも、ジョンストンは『秘密仏教』の著者に面会に行き、帰国後ダブリン支部を結成したという [MAE p. 12]。当時シネットは神智教会ロンドン支部 [ヨーロッパ本部] 長であり、また実際に彼からダブリン支部結成の認可を得た [p. 93 参照] のであるから、この説が妥当であることはいまさらいうまでもない。

p. 113 注(60) エグリントンは自分は神智教徒ではなかったが、忠実とはいえないまでも、エイ・イーの精神的な弟子だと考えられていたことを認めている [MAE p. 21]。

p. 115 注(76) 一生を神智教に捧げ、独身で通そうと決意していた初期の神智教徒にとっては、ジョンストンの結婚 [1888 年 10 月。p. 92 参照] はかなりなショックであつたらしい [MAE p. 17]。現にエイ・イーもその行為を慨歎し、もはやジョンストンはなんびとの師表たりえないと断言している [A p. 91]。

p. 117 注(95) エイ・イーはブラヴァツキ女史に対しては終生忠誠を失わず、またジャッジは別だが、ベサント以後の神智教会をまやかしだといって攻撃した [MAE pp. 163-6]。

× × × × ×

『A. E. と The Hermetic Society』は校正の途中で急に責了となったために、意に満たない点が若干残った。以下に正語表を掲げておく。

正 誤 表

ページ	行	誤	正
79	下から 6	Cotemporary	Contemporary
81	上 " 8-9	脱落	MIW Estella Ruth Taylor: The Modern

Irish Writers. Cross Currents of
Criticism. Lawrence, 1954.

84	上	"	6	Peter Piper ...	改行
"	"	"	8	[U/pp....]	[U pp....] とし, 1 行下げる。
85	"	"	8	[U/pp....]	[U pp....]
96	"	"	2	1898年5月9日	1898年6月9日
98	下	から	7	...触れている ⁽⁸⁹⁾ 。	...触れている ⁽⁹⁰⁾ 。とし, 以下(90)~(98) の注の番号をひとつずつずらし, (91)~(99) とする。
103	"	"	14	DDP. 21	DD p. 21
104	上	"	16	エイ・イーガ	エイ・イーガ
116	下	"	4	(89)	(90)とし, 以下(90)~(98) の注の番号をひとつずつずらし, (91)~(99) とする。